

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第486号 2022年9月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

言葉と星座 西 高弘

高校生の時、現代文の先生が「すぐれた文学作品は、何度も読み返せる」と話しておられたのを覚えています。それは、人は言葉を「理解」するだけではなく、その心模様や体験の蓄積により、その受け止め方が変化するからでしょう。言葉に接したときには、まずその内容を「理解」することが大切であり、それには言葉を読み解くスキルを学ぶことが必要です。

しかし私達は言葉を理解すると同時に、言葉に伴う感情や感覚をも体験しています。たとえば、大切な人を失った人が「遠雷鳴り止まず」と俳句を詠むのを見れば、いつまでも静まらない心の動揺や喪失感が感じられます。その「ああ、この感じ」という感覚を連想させた体験を、記憶の中からすくい上げ、その背後の感情や感覚を追体験するのです。この様な感覚を連想させる言葉を「半熟卵の言葉」と呼びましょう。これを、いつまでも心の波立ちが静まらないのだと言葉で説明すれば、理解は容易でも、もう生々しい感触は失われます。この様な言葉を「固ゆで卵の言葉」と呼びましょう。この様な半熟卵や固ゆで卵の言葉の世界に、私達は暮らしている様に思われます。そしてこの様な半熟卵の言葉を味わうスキルもまた、

学ぶことが可能なのでしょうか。私が小学校五、六年生の時、吉永先生が担任の先生でした。その国語の授業では、言葉の背後にある筆者や登場人物の思いを探ろうと、クラスの皆が熱中していました。それはどんな意見も許容される、安心感と熱気と一体感に包まれた、大切な日々でした。その様な中で、半熟卵や固ゆで卵の言葉に慣れ親しんでいたのです。この感覚を何に例えれば良いでしょうか。それは例えば先生と一緒に夜の浜辺に座り、皆で星を指さしながら、あれが北極星で、こちらが大熊座、などと思いついて星座を探している様な感じ、ともいえるかもしれません。そしてこの様な感覚は今もなお、たき火の後の残り火の様に、私の中に残っているのです。思えば確かに、緩く言葉をすくい上げるスキルや、明快に言葉を理解するスキルが存在し、それらは学んだり、磨きをかけたります。それができる様に思われます。そしてそのスキルの獲得のために、様々な体験の蓄積とともに、国語の学びが大きな役割を担っている様に思うのです。・・・すべては、私の独り言でした。

(にし内科クリニック)

さざなみ

▼「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけた授業改善が進められています。学習全体計画を立て見通しを持つ。対話の場を設ける。ふり返りにおいて学習成果を確認する等。学習過程が共有できるようになった。さらに、国語科においては、目標が「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」と明確になったことにより、力の入れどころがはつきりとしてきた。▼授業改善の効果をあげたものにタブレットの活用やカリキュラムマネジメントの推進がある。タブレットの活用では、ひとり勉強やグループ学習で効果が見えてきている。ひとり勉強では、自分の考えを持つつという段階において、変化がみられるようになった。書いた文を読み返したり、書き加える活動に幅が生まれたからである。文字の読みやすさは、グループの話し合いにおいて、意見を比べる、似たものをまとめるという活動を生み出している。▼カリキュラムマネジメントの推進においては、「読む・情報・書く」という活動が仕組まれた教材において効果をあげている実践が生まれている。例えば、4年生で、「世界にほころ紙」(読む)と「伝統工芸のよさを伝えよう」(書く)では、地域の文化に着目し、総合的な学習の時間とつなぐ単元構想が生まれるなど、注目する実践に広がっているのがうれしい。

(吉永幸司)

「ラグビー型の授業を目指して」
川端 大介

「おっはようございまーす！」と元気に登校する一年生の子から、指導の活力をいただいた二学期の初日であった。
学級の子ども達は一学期終わりとあまり変わらず、リラククスしているように見えた。きつと、心いっぱい満たされた夏休みだったんだらうなと思いつつ、全員がそうではないかもしれない。だから、担任である私が元気を届けようと思いに決めて子ども達と関わった。
私の学校での、二学期初めての物語教材である『やくそく』の学習が始まった。ここでは、登場人物という分析の視点を基にして指導していくと決めていた。加えて、二学期の国語科で目指していた授業を自分でネーミングしてみた。その名も「ラグビー型授業」である。それと対比しているのは「キャッチボール型授業」である。後者は、教師と子どもとのやりとりだけの授業を名付けた。前者は、ラグビーの仲間がパスを少し後ろにつないで、全員で前進してトライを目指す授業である。トライする範囲は広い。これは、物語の解釈の幅の広さと捉えている。教師の発問をラグビーボールとするならば、発問した瞬間から子どもたちは前進を始める。その「ラグビー型授業」を目指して、「やくそく」を指導していった。

先述した通り、「やくそく」では、登場人物の検討を行いたかった。ラグビー型授業に向けた発問は次のようにした。

「木のは」は、登場人物だといえますか。いえませんか。」

である。この発問をして三秒程度教室が静まりかえった。しかし、その数秒後に子どもたちが前進し始めた。「登場人物だと思いません。風にゆられて動いているからです。」「登場人物ではありません。人間のように話したり考えたりしてはいないからです。」「登場人物ではありません。役が必要にならないからです。」等の意見が出た。その後も、子ども達から様々な意見が出された。

結論、木のはは話をしていないし、気持ちが悪かかれていないので登場人物ではない。

きつと、まだまだよい発問は存在するのだと思うが、今回の登場人物を分析する学習は私が目指すラグビー型の授業であった。途中でボールが落ちて仲間が全力で走って取りにいってくれる。ボールを取られそうになったら、仲間が全力でブロックしてくれる。そんな学習を毎日していけるのであれば幸せだなあと私は思う。

さらに教材研究や教材分析を行って、子ども達に生きて働く力が身につくよう努力していく。
(守山市立立入が丘小学校)

教材研究
川部 長人

十一月にある「近江の国語実践研究会」で実践提案を行うことになりました。教材は『注文の多い料理店』（東京書籍・五年生）で実践を行います。今回、『注文の多い料理店』で実践提案を行うおもうと思った理由は、私が小学生時代に受けた国語の授業で一番記憶に残っているからです。小学五年生の時に学んだ教材のおもしろさを、教師という立場で子ども達に伝えたいという思いから教材を選びました。

リモートの例会でしたが、さざなみの先生方からたくさんご意見をいただき、『注文の多い料理店』の教材のおもしろさはどこか考えてみました。教材のおもしろさとして、まず「二つの意味を持つ言葉や表現」があります。好光先生から、「このお話は、二人の紳士が看板と十三の戸に書いてある言葉に反応し、推測し判断し、そして行動に移すという繰り返しで展開していく。二つの意味を持つ言葉や表現に注目するということ」は、勿論、題名にも関わるが、特に戸に書いてある十三のそれぞれ言葉を書いたの紳士がどのように解釈しているのか、同時にこの戸の言葉を書いた店の主人（本文では親方）の隠された意図を解釈する上で有効である。二人の紳士の解釈と親方の策略の駆け引きを味わうのに有効である。お話の面白さを構成面で支えているのは、こ

の二つの意味を持つ言葉に対する双方（二人の紳士と親方）の思い入れがちぐはぐであるという点にあるからである」という意見をいただきました。私も子どもの視点で教材を読んでみましたが、双方のかけあいがあると感じました。

また、『注文の多い料理店』で学んだことをもとに、宮沢賢治の他の作品を読むおもしろさもあると思います。川那部先生から、「6年生で『やまなし』『イーハートブの夢』が教科書教材として挙げられていました。そこで、場面の比較や表現の比較を通して、作者の思いを探っていきました。それらを通して、賢治が意図的に、色、形などの表す言葉を選択し価値をつけていることが分かりました。たとえば、白、青はよいもの（今回も2匹の犬は白くまのような）で、赤、黒は悪いものとされています。危険なもの色や形を視点に、他作品を読み比べていくことで賢治の作品像や作者像を明らかにしていきながら、そこに伝記の『イーハートブの夢』を読み重ねること、賢治の作品像や作者像をとらえる授業をしたことがありません。」という意見をいただきました。

その視点で他の作品を読んでみると、今までと違う気付きがたくさんあったので、宮沢賢治の他の作品を読み比べる活動も取り入れていきたいです。
他にもたくさん教材のおもしろさに気付くことができ、授業を行うのがとても楽しみです。
(東近江市立能登川南小学校)

「語彙力」

川端 由起

「動物園のじゆうい」に夏休み明けから取り組んでいます。学力の幅があるため、プリントでの学習にしようか悩みましたが、15マスのノートをめいっばい使って学習していきます。

第2次から、それぞれの朝、昼、晩のじゆういさんの仕事と工夫を書いてみよう、という主題で授業を進めました。朝の仕事と工夫を書かせた時、仕事は「どうぶつ園の中を見回ること」と書いてる児童が多く、理解出来ているな、と思っていました。ところが、工夫の箇所を書かすと「なぜか」と、元気なときの動物の様子を見ておくと、病気になるたとき、すぐに気づくことができるから、動物園を見回すのだよね。」という因果関係を示すと、教室から「あ、そうか」という声が聞こえてきました。仕事と工夫を見つげよう、と問いただしたため、子どもたちは、仕事

と工夫は近くに書かれていますか、思いついたのか、工夫というものが何かわからなかったかどちらかだでは、「工夫は何なのか」とクラスで考えていくと、毎日、「おはよう。」と言いなながら家の中へ入り、声もおぼえてもらうようにしている。ここなのではないかという声が何人からか上がりました。「どうして？」と聞くと、「毎日とあるから。」「声もとあるから。」と根拠を言ってくれました。

国語力をあげるのには豊かな語彙力と読解力が必要と言われますが、工夫とは一般的に何か？をも少し突き詰めてから、本文の問いに入ってもよかったですと考えました。

後半の授業では、「お仕事紹介文を書こう」ということで、様々な仕事の紹介文を2年生で書ける範囲で書き、両親に見てもらおうという設定を組んでいます。自身の興味のある仕事について時間を追って紹介し、工夫まで書けるようまだ2年生なので、要約はせず、ほとんどが本文を写す形です。ここで培った力を、来年の「すがたを渡る大豆」の食べ物変身ブックで、素敵な物が書けるようにしていきたいです。

(草津市立志津小学校)

読書感想文

桑原 孟夢

2学期に入り、子ども達が次々と夏休みの宿題を提出してきた。

一生懸命頑張ったワークや、一行日記、楽しい思い出がたくさん載っている絵日記などいろいろ種類があった。その中でも、嬉しいことが二つあった。それは、読書感想文のことだった。

ある一人が提出してきた読書感想文に、「名前の大切さ」について書いているものがあった。これは、自分が子ども達に平日頃伝えていることだ。この「名前の大切さ」は、自分自身が小学校3年生の時に当時の担任の先生から教えていただいたことだ。その先生は、「名前は自分が他の人から初めて貰ったプレゼント。どんなプレゼントよりも大切に。」と仰っていた。自分はこれをそのまま子どもたちに伝えた。自分の名前は学校で書く回数はとも多く、慣れから乱雑の書く子どもが多いと思う。または、こういった贈り物という認識がなく、書いている子どももいると思う。

プレゼントを貰うと誰しもが嬉しい。それが貰い続けていると、感謝の気持ちや特別感が失われていく。あつて当たり前といった感覚になるのではないか。子どもに

とって名前にそこまでの感情がないのかもしれないが、この読書感想文に書いた子どもは名前を授けてくれた親や家族に感謝の気持ちをもってきれいに、丁寧に書いている。

こういった子どもが一人でも増えてくれればと思う。

もう一つ、子どもたちの読書感想文で「縁」について書いた子どももいた。その子どもは戦争で学校に行けない子どもがいる中で自分は学校に行け、友だちと仲良く学べ、遊べることに感謝し、いま出会えている人たちとの縁を大切にしたいといったことを書いていました。読書感想文を書くために読んだ本が戦争をテーマにしたものだったから、「縁」について書ける文章力や構成力に驚かされた。自分自身も「縁」に対しておおきく大切にしている部分がある。良縁は自分の心を満たしてくれ、活力になると思う。また、悪縁にも意味があると思う。苦難に遭ったり、試練になったりするがこれは自分を成長させてくれる糧になると考える。ただ、そういった「縁」に気づかず過ごしていることがある。

常に意識して、ありがたみの気持ちを抱くようにするこの読書感想文を書いた子どもを見習いたいと感じた夏休み明けの2学期だった。

(京都女子大学附属小学校)

すべての子どもの学びを保障できる学校をめざして 池崎 繁伸

「大一大万大吉」これは、佐和山城主の石田三成の旗印である。「一人はみんなのために、みんなは一人のために尽くせば、みんなは幸せになれる」という意味があり、本校の校訓とも言えるものがある。みんなの役に立つことにより、自分のことを価値ある存在だと認め、自分を好きになる。そして、「みんなは」その「一人」を

かけがえない存在として認め支える。そのような仲間との認め合い、支え合える信頼関係を築いていくことが「みんなの幸せ」に繋がるのだと、私は捉えている。今年度四月、佐和山小学校に校長として赴任した。伝統ある「大一大万大吉」の志を大切に、誰もが安心して自立に向けて学び合える学校を「みんな」で創造していきたいと考えている。めざす学校像として、「何があっても子ども命(人権)を守る学校」「すべての子どもの学びを保障する学校」を掲げている。また、「すべての子どもたちが安心して過ごせる場をつくること」や「多様な考え・価値観をもつ一人一人の教職員が安心して働ける職場づくり」を大切にしている。

きるよう、通常の学級においてもユニバーサルデザインの視点を取り入れた環境の調整等を行っていきたくて年度当初から考えていた。そのような中、4月下旬の家庭訪問を通して、次のような保護者の訴えがあることが分かってきた。

放課後等デイサービスの施設に對して、「ここは頭のおかしい人が行くところや」と話している子どもがいた。それを聞いていた放課後等デイサービスに通う我が子が周りの子どもたちの目を気にしている。放課後等デイサービスに行く時刻を他の子どもの下校時刻とずらしてほしいとのことであった。

この事案について生徒指導主任から報告を受けた際、本校の最重要課題の一つとして、全校体制で改善に向けて取り組んでいくことを確認した。早速、生徒指導主任が、この事案に関する生徒指導通信を配信し、情報共有を図ってくださったおかげで、多くの教員が問題意識を持つことにつながった。生徒指導通信を読み、様々な立場の教職員が、自分自身の問題として、この事案に関する思いや考えをメッセージに書き込んでいった。特に、特別支援学級の担任や人権教育部から、具体的に継続した取組の必要性について、書き込まれていくこととなった。私自身は「子どもの事実を見過ぎず、問題提起していただいた方々に對して、とても有難く思います。障害の有無や何かができる・できない等に

かかわらず、すべての子どもの存在そのものに尊い価値があるのだということと、私も含めてオール佐和山で、しっかりと見つけ直し、じっくりと学び合っていく機会としていければと思います」と書き込んだ。

第2回校内研究全体会の前段、「この事案に對して、私たちができること、心がけていきたいことは何か」を一人一人の教職員が考え、小グループで交流を行った。さらに、特別支援学級担任や人権教育部を中心に具体策の検討が重ねられていった。人権教育部による「佐和山人権の日」での取組や教職員の人権教育研修会等で、子どもたちや教職員自らの理解啓発を図っていった。実践や協議を重ねる中で、特別な支援を要する子どもたちを取り巻く様々な課題が浮き彫りになっていった。交流学級担任の特別支援学級在籍児童に對する意識の問題や「交流が十分共通理解できていないことなどが改善すべき点として出されている。このような点について、各教職員が一学期末に振り返りを行い、二学期に向けた具体策を教務主任が運営委員会へ提案し、夏季休業中の職員会議で全教職員に共通理解・共通実践を行っていくことを確認した。

そして二学期がスタートし、まずは徐々に教職員の意識と行動に変容が見られ始めたところである。すべての子どもの学びを保障できる学校をめざして、様々な方々と協働し、より望ましい取組を日々継続していきたい。

(彦根市立佐和山小学校)

編集後記

▼八月例会(第四八五回)は、メールによる研究及び実践情報の交流の機会にしました。研究教材は「注目の多い料理店」(東書5年)▼教科書ではめあてを「物語をおもしろくしている表現のくふうをさがし、見つけたひみつを解説する文章を書こう」と示しています。学習活動は「おもしろさのひみつを解説する文章を書こう」という導

きです。▼情報交流の資料として同人から次の提案がありました(キーワードや概要を示しています)・内容の面白さ、表現の面白さ、構造の面白さ、作者の意図の面白さを共有する(岡島)モデルとなる学習指導案の提案(三上)単元の全授業のワークシート(解説ノート)読み取りシート(本時指導案(谷口)教材分析と指導事項の確認(海東)5年生の読むことの実践計画(宮沢賢治童話について(森)私が感じたおもしろさ・登場人物に動かされる物語(弓削)板書を活用した一時間の授業(吉永)フアンタジの入口と出口・注文を吟味しながらの分類と比較(川那部)作品の面白さを対話を通して学ぶ(北川)子どもの初めの感想記録(杉嶋)学習の手引きの観点を整理する(好光)学習構想として学習のねらい・学習の重点・主な学習活動(北島)▼教材研究から学習方法モデル指導案等情報が集まりました。これらの提案を参考に「近江の国語実践研究会」(11月彦根市において開催予定)で川部長人さん(能登川南小)が実践の提案をします▼巻頭には、西高弘先生から玉稿を頂きました。深謝。

(吉永幸司)